

# スキップに関する一考察

## —— 事例研究その(1) ——

小岩井 きし子  
Kishiko Koiwai

### I. 動機と目的

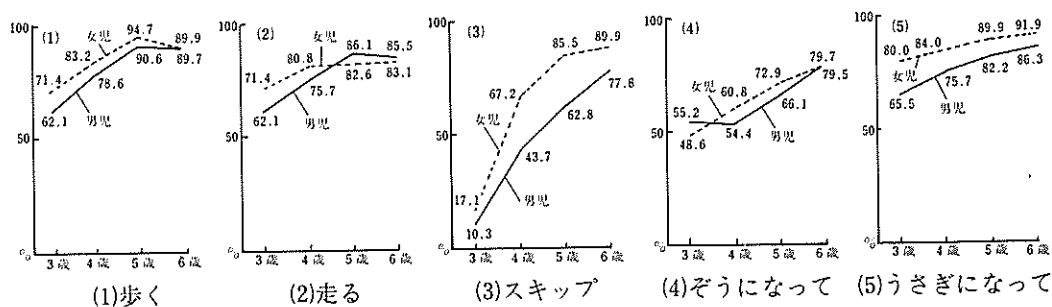
私が行なっている音楽リズムの授業において、ピアノでスキップのリズムを弾き、それに合わせて学生がスキップをするというのを行うが、ときどき、そのスキップがうまくできない学生がいる。幼稚園、保育園の子どもたちのスキップをみると、3歳からできる子どももあるし、6歳でもまだできない子どももある。

スキップについて、私の幼い頃を思い出すと、スキップ、スキップと練習したのではなく、片足スキップからだんだんに、いつのまにか、なんとなくスキップができるようになったと思う。幼い頃のあそびには、石けり、長なわとび、ゴム段、鬼ごっこなどがあり、近所の年齢に上下のある子どもたちがおおぜい集まって、それらのあそびで遊び、それがスキップのできるようになった一因ではないかとも考える。

寛三智子は、『子どもの発達と音楽』の中で、「幼児が自然にスキップをはじめていくのは、大まかにいって3歳後期までである。これはいわゆる身体の成長（身長や体重）よりも、日常生活経験やあそびの多少との関係が深く、今日流行の過保護による犠牲者たちは非常におくれてはじまる点に注目したいものである」<sup>(1)</sup>と論じている。

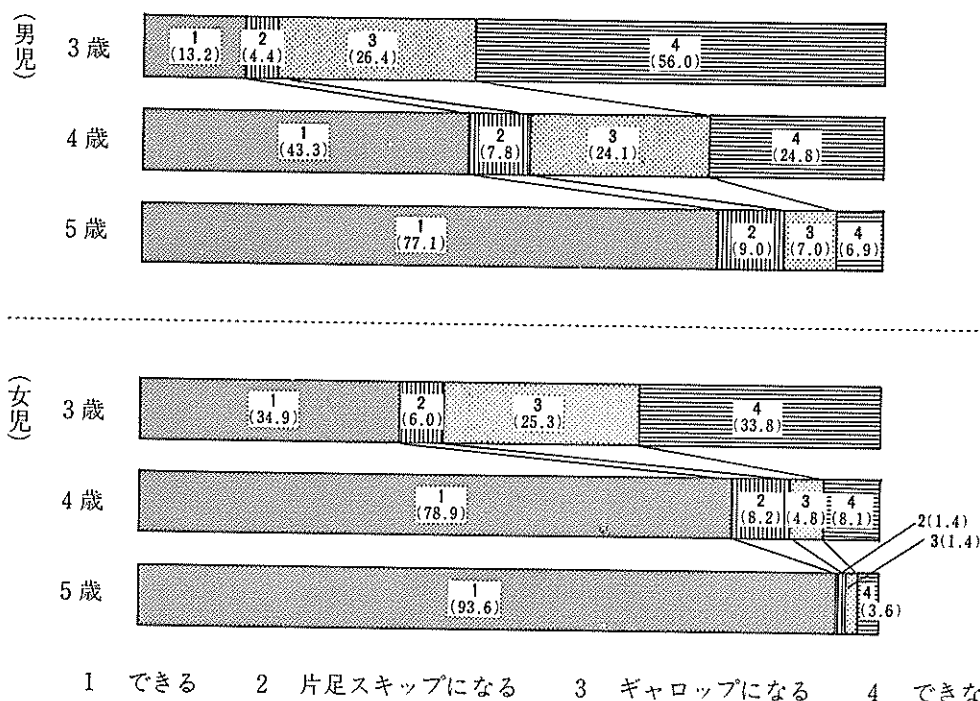
また、『日本の幼児の成長・発達に関する総合調査』<sup>(2)</sup>の中の「音感・リズム感の発達」の章の＜体を動かす＞という調査<sup>(3)</sup>では、音楽に合わせて歩くこと、走るとは80%以上の幼児ができるが、音楽に合わせてスキップをしたり、ぞうになって動いたりすることはできる割合が下がっているとし、付点やゆったりしたリズムは幼児にとって動きにくいものであると述べている。その調査のグラフは次の様である。

男女別、年齢別にみた＜体を動かす＞の回答結果（できている割合）



また、波多野勤子は、『幼児の心理』<sup>(4)</sup>の中で、ゲゼル (A. Gesell) はアメリカの子どもは4歳でスキップができるとし、日本では4歳半位でできるようになると述べている。そして、前述の『日本の幼児の成長と発達に関する総合調査』の中の「運動的発達」<sup>(5)</sup>の章の中では、3～5歳までは、女児の方が男児よりも一年早くスキップができるという、次のような調査結果を示している。

5 m程度の距離をスキップできますか (第2期) (単位%)



私は、音楽に合わせてスキップがうまくできない学生のいることや、スキップのできる子とできない子との差が大きいことに興味をもち、体全体のバランスを必要とするスキップが、運動能力の発達とどのような関係があるのか、どんな教育的 (環境的) 条件を用意したらスキップができるようになるかを考えたい。まず、今回は、スキップに関係のある運動を考え、運動項目を作成し、その項目を保育の現場の教師に調査していただき、それを基にスキップに関して考えたい。

## II. 研究方法

### 1. 調査項目の作成

#### (1) スキップのできるようになる過程

まず、実際に子どもを観察して、スキップができるようになる過程を4項目に分けた。

①スキップができない ②ギャロップになる ③片足スキップになる ④スキップができる の4項目である。この4項目は、前述の『日本の幼児の成長・発達に関する総合調査』の「運動的発達」の章のスキップの調査項目<sup>(6)</sup>とも合うが、調査者が、②と③とを分ける必要がなく、また、②と③がはっきり区別がつかないと思われたら、②と③とはいっしょでも良いとした。

## (2) スキップに関係のある運動項目の抽出

### (イ) スキップの運動的側面からの抽出

『保健体育学大系』の「発達と体育」<sup>(7)</sup>の中に、日本で一般に、基礎的運動能力とよばれているものは、①はしる ②とぶ ③なげる ④懸垂能力などであるとし、アメリカでは1935年頃から因子分析法をもちいて基礎的な運動能力を決定しようとするころみが見られ、それらの人の中の、ラーソンとヨーコム (Larson, L. A. and Yocom, R. D) は、基礎的な技能として、(a)走・(b)跳・(c)捕・(d)投・(e)手でささえての跳躍・(f)登攀・(g)ける、の7項目をあげている、とあるが、スキップでははしる・とぶの2項目が該当すると考える。

スキップのできない子どもは、両足をそろえてとんだり、高い所から両足をそろえてとび降りる時などに、ひざがうまく曲がらないのではないかと、また、つま先がうまく使えないのではないかと、そして、ケンケン（片足とび）も、両足とびと同様な面がうまくいかず、バランスがとれないのではないかと考え、両足とび、片足とび、片足立ちの運動項目をあげ、それぞれの運動を3つの発達段階に分けた。

### (ロ) スキップのリズミカル側面からの抽出

スキップにはリズムカルに動くという要素もある。その意味で、なわとびと共通点がある。なわとびあそびのわらべうたの多くは、スキップのリズムで歌われている<sup>(8)</sup>。そして、なわとびの方がスキップより、手を使う分だけ幼児にとってむずかしく、発達的に後の段階にあると考える。なわとびの運動項目は、4段階とした。また、リズムカルに動くという側面から遊戯との関係を調べるため、2段階の運動項目とした。

### (ハ) その他

他の代表的な運動とスキップとの関係を調査するため、手や足を使う雲梯と登り棒をそれぞれ3段階の運動項目として、付け加えた。

以上の目的とスキップの分析により、次の調査項目を作成した。

お忙しいところを恐縮ですが、調査にご協力下さいますようお願い申し上げます。

#### 調査方法

まず、クラスの子どもを ①スキップができる ②片足スキップになる ③ギャロップになる ④スキップができない の4グループに分けて下さい。②と③ははっきり区別が付きませんでしたら一緒でも結構です。その場合は、②と③が一緒と書いて下さい。各質問の項目は、先生がたの日常の観察のなかから、記入して下さい。様子の分からない項目に関しては、テストとして実施していただくのではなく、「かかしになって立ってみましょう」というような呼びかけで、実施していただき、その観察結果についてご記入ください。スキップの4段階に運動のそれぞれの項目をあてはめてください。男女別にお願いいたします。

お忙しいなかをいろいろお手数ですが、よろしくお願い申し上げます。

年少組 年中組 年長組 男 女 (該当するところに○をつけてください)

運動項目		スキップ			
		できる	片足スキップ	ギャロップ	できない
		(人)	(人)	(人)	(人)
両足とび	5mをリズムカルにとべる 5mを1回ずつとまるがとべる 両足をそろえてとべない				
片足立ち	10秒以上できる 5秒位できる できない				
片足とび	リズムカルにできる ふらつきながら少しできる できない				
なわとび	リズムカルに10回以上できる リズムカルではないが10回位できる はしりなわとびならできる できない				
遊戯	リズムカルにできる リズムカルにできない				
登り棒	手と足を使い上までのぼれる 手と足を使い少しのぼれる できない				
雲梯	端から端までいける 少しできる できない				

## 2. 調査方法

### (1) 調査標本と特性

松本市内の農村部にあり、春はおたまじゃくし、秋はイナゴ捕りなど、自然に多く接することができ、特別に体育・音楽指導など行っていない一保育園の全園児。

### (2) 調査人数

年長児（男29人・女21人）

年中児（男17人・女15人）

年少児（男12人・女12人）      計106人

### (3) 調査方法

調査用紙に記入していただく方法をとった。

まず、担任の先生に、スキップについてクラス全員を前に述べた4グループに分けていただき、その人数を書き、その4グループについてそれぞれの運動項目の当てはまるところに人数を書いていただいた。男児と女児とでは発達にちがいのことから、男児と女児とは別々に記入していただいた。

## III. 調査結果と考察

調査した全体の結果は、下記（表1）のとおりである。

運動項目		スキップ			
		スキップ			
		できる	片足スキップ	ギャロップ	できない
		96(人)	3(人)	0(人)	7(人)
両足とび	5mをリズムカルにとべる	96	2	0	7
	5mを1回ずつとまるがとべる	0	0	0	0
	両足をそろえてとべない	0	1	0	0
片足立ち	10秒以上できる	83	2	0	3
	5秒位できる	13	1	0	4
	できない	0	0	0	0
片足とび	リズムカルにできる	94	1	0	4
	ふらつきながら少しできる	2	2	0	2
	できない	0	0	0	1
なわとび	リズムカルに10回以上できる	60	0	0	0
	リズムカルではないが10回位できる	11	0	0	0
	はしりなわとびならできる	8	0	0	1
	できない	17	3	0	6
遊戯	リズムカルにできる	93	3	0	6
	リズムカルにできない	3	0	0	1
登り棒	手と足を使い上までのぼれる	77	0	0	1
	手と足を使い少しのぼれる	16	1	0	0
	できない	3	2	0	6
雲梯	端から端までいける	72	1	0	0
	少しできる	14	0	0	0
	できない	10	2	0	7

（表1）

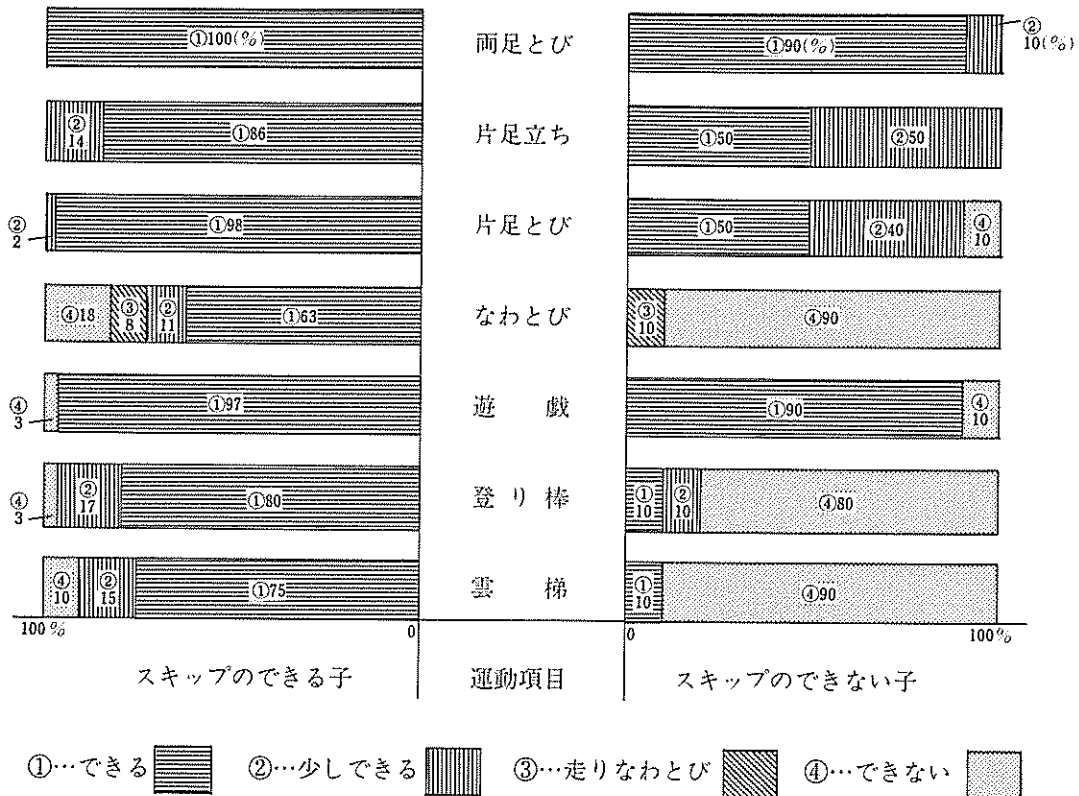
全体でスキップのできる子は90%、片足スキップになる子が3%、ギャロップになる子が0%、スキップのできない子が7%だった。スキップのできる割合が高いのは、11月に調査したためかもしれない。いずれにしても、スキップができない（片足スキップになる子を含めた）というのが全体の10%という結果は意外であり、そのため標本の大きさが不十分で、以下の数字に誤差があることを認めざるを得ない。全体的な傾向として数字を捉え、考察したい。また、調査表の項目設定も調査実施者に正しく区別されないものがあつた。今回は

スキップができる、できないの2つの範疇にわけ、調査結果を考察したい。

### 1. 調査対象児全員の総合結果

調査対象児全員を、スキップができる、できないの2グループに分けて、それぞれの運動項目の割合を表にした。(図1)

(図1) スキップのできる子・できない子



(図1)をみてスキップのできる子とスキップのできない子とを比較検討すると、スキップのできる子の方が、すべての運動でできる割合が高い。両足とび、片足とび、遊戯では、ほとんど全員、その運動ができている。スキップのできない子では、両足とびもできない子が少数あり、片足立ち、片足とび、それぞれでは半数の子どもができていない。そしてやはり、スキップのできない子は、なわとびもできない傾向がある。登り棒も雲梯もほとんどできていない。

## 2. 男女別の結果

男女別の結果は下表2である。

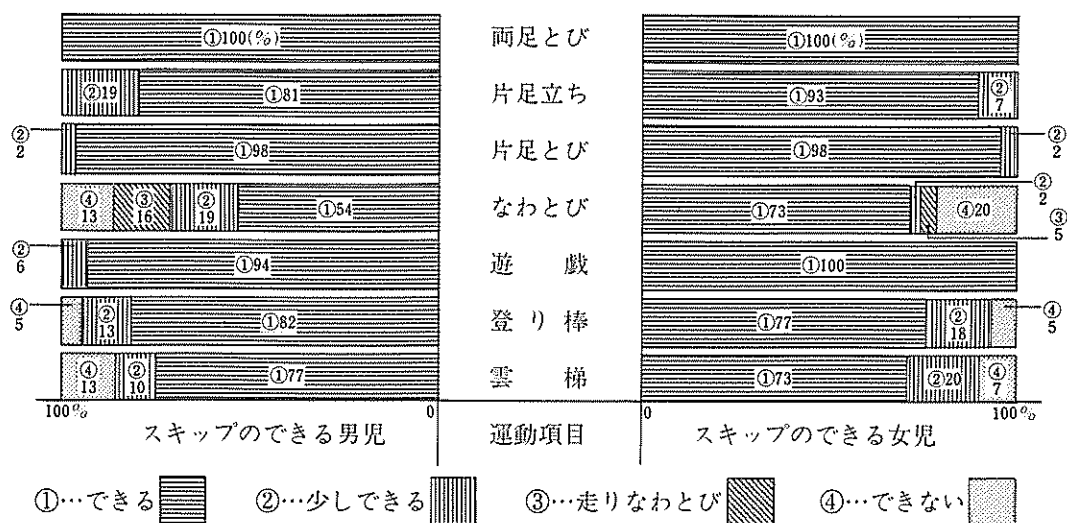
運動項目		スキップ			
		できる		できない	
		男52(人)	女44(人)	男6(人)	女4(人)
両足とび	5mをリズムカルにとべる	52	44	5	4
	5mを1回ずつとまるがとべる	0	0	0	0
	両足をそろえてとべない	0	0	1	0
片足立ち	10秒以上できる	42	41	4	1
	5秒位できる	10	3	2	3
	できない	0	0	0	0
片足とび	リズムカルにできる	51	43	4	1
	ふらつきながら少しできる	1	1	1	3
	できない	0	0	1	0
なわとび	リズムカルに10回以上できる	28	32	0	0
	リズムカルではないが10回位できる	10	1	0	0
	はしりなわとびならできる	6	2	1	0
	できない	8	9	5	4
遊戯	リズムカルにできる	49	44	6	3
	リズムカルにできない	3	0	0	1
登り棒	手と足を使い上までのぼれる	43	34	1	0
	手と足を使い少しのぼれる	7	8	0	1
	できない	2	2	5	3
雲梯	端から端までいける	40	32	0	1
	少しできる	5	9	0	0
	できない	7	3	6	3

(表2)

(表2)を基に男女別の比較は(図2・図3)である。

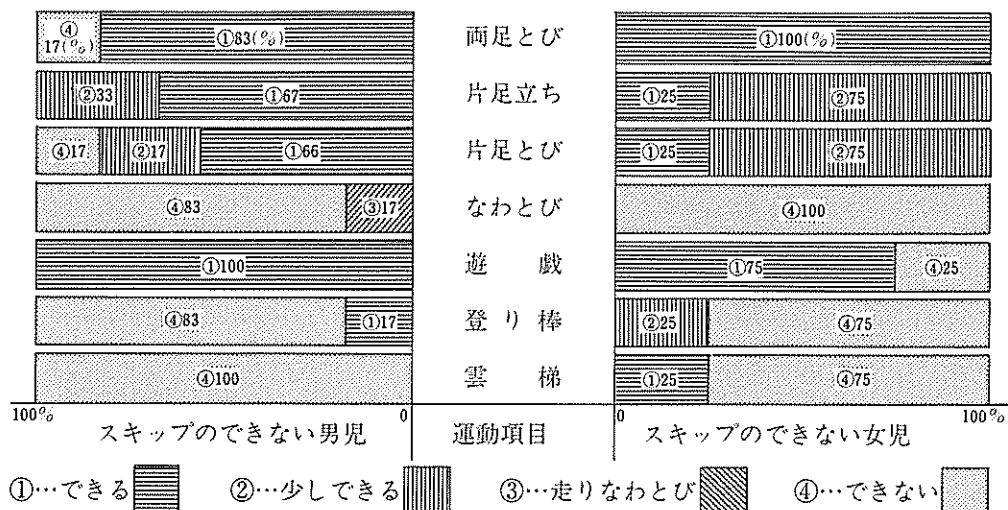
男児のスキップのできる割合は90%、できないは10%、女児では、できるが92%、できないが8%で、スキップのできる割合は、女児の方がわずかであるが高かった。

(図2) スキップのできる男児・女児



スキップのできる男女の比較では、女児の方が男児より、片足立ち、なわとび、遊戯においてできる割合が高い。登り棒、雲梯では男児の方が女児よりできる割合わずかであるが高い。

(図3) スキップのできない男児・女児



スキップのできない男女の比較では、両足とび、登り棒、雲梯以外は男児の方が運動のできる割合が高い。これは、(図2)と反対の結果である。スキップのできない女児では、片足

立ち、片足とびでうまくできない割合が高く、そしてまた、雲梯のできる子があるというおもしろい結果がでたが、標本の大きさの不十分さに起因しているともいえる。

### 3. 年齢別の結果

年齢別の結果は下表3である。

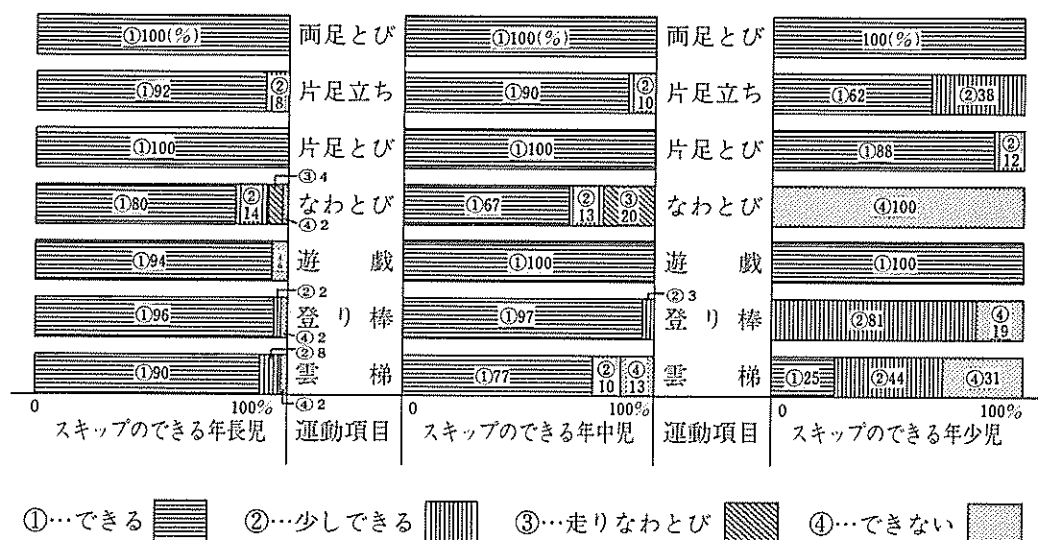
運動項目		スキップ				
		できる			できない	
		年少16(人)	年中30(人)	年長50(人)	年少8(人)	年中2(人)
両足とび	5mをリズムカルにとべる	16	30	50	7	2
	5mを1回ずつとまるがとべる	0	0	0	0	0
	両足をそろえてとべない	0	0	0	1	0
片足立ち	10秒以上できる	10	27	46	4	1
	5秒位できる	6	3	4	4	1
	できない	0	0	0	0	0
片足とび	リズムカルにできる	14	30	50	4	1
	ふらつきながら少しできる	2	0	0	3	1
	できない	0	0	0	1	0
なわとび	リズムカルに10回以上できる	0	20	40	0	0
	リズムカルではないが10回位できる	0	4	7	0	0
	はしりなわとびならできる	0	6	2	0	1
	できない	16	0	1	8	1
遊戯	リズムカルにできる	16	30	47	8	1
	リズムカルにできない	0	0	3	0	1
登り棒	手と足を使い上までのぼれる	0	29	48	0	1
	手と足を使い少しのぼれる	13	1	1	1	0
	できない	3	0	1	7	1
雲梯	端から端までいける	4	23	45	1	0
	少しできる	7	3	4	0	0
	できない	5	4	1	7	2

(表3)

年長児は全員がスキップができ、年中児は94%、年少児は67%、であった。

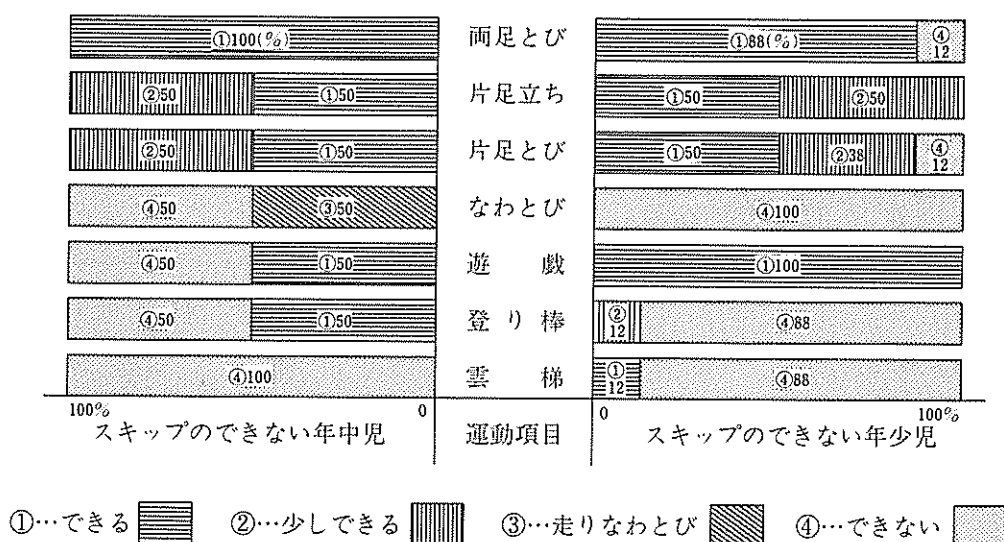
スキップのできる子、できない子に分け、年齢別に各運動項目を比較した結果は次の図4・5である。

(図4) スキップのできる年長児・年中児・年少児



スキップのできる子どもを年齢別にみると、遊戯を除いて、ほとんど年齢順に運動のできる割合が高くなっている。遊戯の項目は2つだけだったが、はっきり曲を指定し、上達の差を調べたら、この項目は100%とはならず、もっとちがった割合になったと考える。

(図5) スキップのできない年中・年少児



スキップのできない子どもを年齢別にみると、年中児が両足とびとなわとびと登り棒で年少児よりできる割合が高い。遊戯と雲梯では年中児より年少児の方ができる割合が高い。この逆の結果については、1. 標本の大きさが不十分なことからくる誤差、2. 個人差による誤差、3. 教育環境による誤差、などが考えられる。

以上、調査結果を3つの面から比較してみたが、次にスキップのできる子とできない子を運動項目別で下記のような表にまとめた。

運動項目	スキップのできる子	スキップのできない子
スキップ	9割できる。女兒の方がわずかにできる割合が高く、年齢とともにできる割合も高い。	1割できない。男児の方ができず、年齢が低いとできない割合も高い。
両足とび	全員できている。	年少・男児にできない子どもがわずかある。
片足立ち	1.5割できない。男児の方が女兒よりできない割合が高く、年齢が高くなるにつれて、できる割合は高い。	半数できない。男児の方が女兒よりできる割合は高いが、年齢差はない。
片足とび	わずか年少にできない子があるが、男女差はない。	半数できない。男児の方が女兒よりできるが、年少男児に全然できないがある。
なわとび	約6割できている。女兒の方ができる割合が高く、年少では全員できず、年齢が高くなるとできる割合も高くなる。	走りなわとびができるが、年中男児に1割あるのみで、あとの子どもは全然できない。
遊 戯	わずか年長男児にできないがある。	わずか年中女兒にできないがある。
登 り 棒	8割できている。男児の方が女兒よりできる割合が高く、年少では全員できない。	わずか年中男児にできるがある。
雲 梯	7.5割できている。男児の方が女兒よりできる割合が高く、年齢が高くなればできる割合も高くなる。	わずか年少の女兒にできるがある。

#### IV. まとめ

以上の結果から、スキップのできる子がスキップのできない子より、調査したすべての運動においてできる割合が高いことから、スキップが運動能力の発達と深いかわりがあると考える。特に、両足とびは、スキップのできるようになるひとつの運動とみてよい。片足立ち、片足とびも、スキップができる前段階の運動とみてよいと考える。なわとびは、スキップができてから後にできる運動と考える。遊戯では、設問の吟味不足でこのような結果にな

ったと反省する。登り棒、雲梯では、やはりスキップができてから後に、できるようになる運動とみてよいと考える。

スキップのできる子では、運動項目の発達も年齢順にできるようになっている。男女の運動項目のできる割合も、一般にいわれているような結果がでた。しかし、スキップのできない子では、年齢差もあまりみられず、男女の運動のできる項目も、一般的ではない結果がでた。これは、スキップのできない子どもが、心理的また運動発達上の何かのつまずきが原因で、スキップができないのではないかと考えられる。しかし、特別な理由がなければ、いずれスキップはできるようになるのだから、できない子どもに、スキップへの恐れをいだかせてはいけない。むしろ、スキップができない、何の運動ができないからと、子どもが消極的にならないように気をつけなければいけない。

## V. 今後の課題

今回は、運動項目を作成して、スキップを考えたが、今後、スキップのできない子どもに、どのような具体的指導をしたらスキップができるようになるのか、また、スキップのできなかった子どもが園生活において、スキップができるようになったことで、友人関係、クラスの位置関係に変化があるのかを調べ、どんな教育的、また環境的条件をそろえたらよいのかを考えたい。そしてまた、音楽に合わせてスキップのうまくできない学生のどんなところに原因があるのかを調べ、スキップを考えたい。

### <注>

- (1) 『幼稚園保育園の音楽教育の理論と実際、子どもの発達と音楽』音友、S52年 P. 131
- (2) 村山貞雄編 サンマーク出版 1987年
- (3) 同上 P.385
- (4) 小学館 P.119
- (5) (2)と同じ P.43、P.59
- (6) 同上 P.19
- (7) 代表著者 東龍太郎 中山書店 P.159～160
- (8) 『東京のわらべ歌』 尾原昭夫 柳原書店 S54年 P.181～199  
『子どものあそび100』 小岩井きし子 電算印刷 S61年 P.78～84